

ナイチンゲール研究

第 8 号

JOURNAL OF  
FLORENCE NIGHTINGALE  
STUDIES

Number 8, March 2002

2002年3月

Society for  
Florence Nightingale Studies

ナイチンゲール研究学会

家族看護学の源流を探る  
— 『病人の看護と健康を守る看護』  
より—

寺島久美、三宅玉恵、阿部恵子、  
山岸仁美（宮崎県立看護大学）

## 【はじめに】

筆者らは、ナイチンゲール看護論を基盤にした教育課程のなかで‘家族看護学’の教育に携わっている。それは、看護の対象である人間を家族という小社会のなかでつくりつくりされてきた存在としてとらえて看護を実践する能力の修得を目指すものである。

開学5年目を経た現在、学生のなかに家族を基盤に据えて対象を理解しようとする視線が培われつつあることを実感している。

筆者らはこれまでナイチンゲール看護論から家族看護につながる原理を学び、教育・実践につなげてきてはいたが、ナイチンゲールの著作から直接、家族看護につながる原理を研究的に探っていくことには着手してこなかった。

今回、改めてナイチンゲール看護論と家族看護の関係性について述べた文献を探ってみたところ、薄井が「ナイチンゲールには人間の生活を、家族を単位として根底にすえる考え方が常にある」<sup>1)</sup>と述べていること、また、近年発刊された米国の家族看護学の文献<sup>2)</sup>に、F.ナイチンゲールの業績を引き継いでいる旨が記載されていることがわかった。しかし、ナイチンゲールの著作と‘家族看護’の関係性について研究的に取り上げた論文は見当たらなかった。

そこで、自分たちがよってたつ家族看護学の源流をナイチンゲールの著作に探り、ナイチンゲール看護論を基盤とした家族看護学を発展させていくうえでの示唆を得たいと思い、本研究に取り組んだ。

## 【目的】

ナイチンゲールの著作から家族看護に関わると思われる論理構造を明らかにし、ナイチンゲール看護論における家族看護学の源流を探る。

## 【用語の概念的定義】

本研究における‘家族看護’の概念を次のように定義する。

「人間は、本来家族のなかに生まれて生まれ、長じては自己の家族を形成しつつ社会に貢献し、老いては家族に見守られながら生涯を終えるようにつくられた存在である」<sup>3)</sup>という人間観に則り、対象の生命力の消耗を最小に持てる力を最大限に引き出せるよう生活過程を整えること。

## 【対象】

『病人の看護と健康を守る看護 1983年（補遺を除く）』（ナイチンゲール著作集第二巻、現代社、1988）

本研究に取り組むにあたり、『ナイチンゲール言葉集』（薄井坦子編：ナイチンゲール言葉集—看護への遺産—、現代社、1995）から、‘家族看護’に関わる内容を探ってみたところ、『病人の看護と健康を守る看護』の論文に重要と思われるセンテンスが多く認められた。この論文は、ナイチンゲールが73歳のときに「シカゴ大博覧会のために、王立英国委員会が提供した女性の仕事に関する論文のひとつとしてまとめられたもの」<sup>4)</sup>とされている。また、「四十年前の彼女自身の創造的な仕事の自己評価である」<sup>5)</sup>と位置づけられている。そうであるなら、そこに示されている家族看護の論理構造を探ることで本研究の目的に到達できるのではないかと考え、研究対象とした。

## 【方法】

1. 共同研究者全員で論文を読み、‘家族看

- 護’に関わると思われる記述をキーセンテンスとして抽出しカード化する。
2. 各々のカードについて、‘家族看護’という観点から意味を読み取り、共通な意味をもつカードをグルーピングし、各グループの意味内容を最もよく表すカードを抽出し、キーカードとする。
  3. キーカード間のつながりをとらえて、‘家族看護’に関わると思われる意味内容を分析・考察し、構造図を作成する。
  4. 以上をもとに、ナイチンゲール看護論における家族看護学の源流について考察する。

### 【結果および考察】

1. キーセンテンスの抽出  
‘家族看護’に関わると思われる記述を抽出したところ、69のキーセンテンスが得られ、それをカード化した。
2. キーカードの抽出  
共通な意味をもつカードをグルーピングしたところ26グループとなり、各グループの意味内容を最もよく表す26枚のキーカードを抽出した。
3. ‘家族看護’に関する意味内容の構造  
各キーカードの論理を読み取りつつ、各々の関係性をとらえて構造を探った。読みとった意味内容の関係性をキーカードを用いて示したものが図1である。

『病人の看護と健康を守る看護』では、対象論をコア概念として、それに目的論が重なり、さらに方法論という重層構造を成していることが浮き彫りとなった。そこで、対象論の円錐の外枠に目的論、その外枠に方法論の円錐を置いた。

すなわち、縦軸は、ナイチンゲールの頭脳に描かれている内容の抽象度を、横軸は、ナイチンゲールの看護論の重層構造の現象の広がりを意味する。

抽出したキーカードごとに読み取って

いった内容を以下に示す。なお、抽出したキーカードを点線で囲って示す。点線内の文頭の番号はキーカードの番号を示し、文末の頁は著作集第二巻に書かれていた頁を示す。実線内は、読み取った結果、得られた論理である。

#### ①ナイチンゲールはどのように対象をとらえていたか：対象論

- (1) 人間誰も生まれてこなければ《ならない》のだから (p127)
- (2) 赤ん坊は病人ではない。しかし赤ん坊は動物の生存形態としては最も弱いものである。これは健康な人に対する看護が要求されるひとつの例にすぎない。もっともこれは非常に重要な例である。(p127)

まず、筆者らは、(1)についてナイチンゲールが《ならない(原文 *must*)》という部分を強調していることに注目した。この強調が何を意味するのか。ここでは「赤ん坊が生まれる」という日常のことに留まらず、人類の必然性という意味が含まれているのではないかと思われた。筆者らは、この表現から普遍性の高い意図が感じられ、ナイチンゲールの頭脳には生命の連続性がイメージされていたのではないかと読みとった。

次に、論文中、ナイチンゲールは「病人を看護する芸術」を「本来の看護」と表現し、「健康についての芸術」を「健康への看護」「一般看護」と著している。そして、「健康への看護」の重要性を表現を変えながら繰り返し強調して述べている。当時、健康への看護という発想はまだ十分に普及しておらず、その理解がいかに困難だったかが想像できる。これは、以下のピショップの解題からも伺い知ることができる。

この論文は彼女が73歳を越してから書かれたものであるにも関わらず、ここには驚くべき新鮮さと創造性が認められる。…ここには注目すべき発展がある。つまり彼女はここで、「保健の技術」が、「病者看護の芸術」とまったく同じ重要

さをもっていると、大胆に言っているの  
である。<sup>6)</sup>

ここでは、一般にはまだ普及していない先  
駆的な発想ともいえる「健康への看護」の必  
要性を「赤ん坊」というわかりやすい例をあ  
げて述べているととらえることができた。

さらに、注目した点は、ナイチンゲールが  
「動物の生存形態としては」と、他の動物と  
の比較において人間のもつ特殊なありようを  
とらえていることである。薄井は「ナイチン  
ゲール看護論の最大の特徴は、彼女の人間観  
にあること、そしてそれは、人間を他の生物  
との連関においてとらえ」<sup>7)</sup>ていると述べて  
いるが、このセンテンスからも対象をとらえ  
るうえでのナイチンゲールの一貫した思考の  
ありようが伺われる。

そして、「健康な人に対する看護が要求さ  
れるひとつの例にすぎない。もっともこれは  
非常に重要な例である。」という表現から、  
「赤ん坊」はわかりやすい例というだけでは  
なく、赤ん坊を健康に育てるための方法、  
か弱いという点では共通な「病人」への看護  
にもつながる基本ともいえるものであり、赤  
ん坊の健康状態は、「健康への看護」が充分  
に行き届いているか否かを示す重要な指標と  
しても位置づけられているのではないかと考  
えた。

これらより、ナイチンゲールは、「赤ん坊」  
が育まれるプロセスを見ながら、その中に潜  
む生命や健康、看護の法則性を読みとって  
いたことが考えられ、(1)と(2)は、具体的  
な現象として表現されながら人類の根元的な  
法則性を内包して表現されているととらえた。  
このようなことから、具体的現象ではあるが、  
土台となるセンテンスだと考え、図1の対  
象論の円錐の最下層に位置づけた。

(3) 彼らとの主要なそして非常に重要な  
ちがいは、看護婦が生きている身体に働  
きかけねばならず、また同じく生きて  
いる心に働

きかけなければならないということ  
である。(p139)

- (4) 家族や学校や職場での生活の営みに  
関する限り、またその芸術は創り出さ  
れていない。(p126)
- (5) 赤ん坊にいかにして食事を与え、  
沐浴をさせ、衣服を着せるかなど、  
また、母親と赤ん坊とにどうしたら  
最高の清潔を保たせることができるか  
などの知識ほど、大部分の女性にと  
って重要なものはないはずなのに、  
これほどなおざりにされている知識  
がほかにあるだろうか。(p127)

この3つのセンテンスからは、「心と体と  
社会関係の統合体としての人間が24時  
間の生活の中で作りつくられる」とい  
う対象への視点を読みとることができ  
た。これは後述の(9)の「…神がわれ  
われの身体とその身体が存在してい  
る世界とのつながりを定められた諸  
法則のなかで…」という表現などから  
も読みとることができ、ナイチンゲ  
ールの頭脳には、外界の条件によっ  
て変化し続ける統合体としての人間  
のとらえかたが確立していたと理  
解することができた。

- (6) 人は「家族」には世話を必要とする  
健康があるなど全然思ってもいないよ  
うである。(p126)
- (7) 家族の生命についてのこの偉大な  
女主人、彼女からすべての人が生ま  
れてきたというその女性は、実際何  
も教えられてはこなかった。(p126)

ここでは、ナイチンゲールが「病人」  
や「赤ん坊」という個人に目を向け  
るだけでなく、「家族」を看護の対  
象としてとらえていたことがわか  
る。さらに、(4)で「学校や職  
場での生活の営み」と表現してい  
ることから、個人や家族をとりま  
く小社会との関係性で人間の健康  
をとらえていたことがわかる。

ここでは、<人間の健康を維持して  
いくための方法は自然に身につく  
ものではないから、健康な状態に  
していくには手をかけなくては  
ならない。健康には、家族や家  
族をとりまく小社会との関係性  
が関与する。>という意味

を読みとった。

- (8) 女性は、本職の看護婦が、病気の法則、病気の原因、病気の徴候、また病気の徴候ではなくてたぶん看護の良し悪しによる徴候などを認識すべきであると同様に、生命の法則や健康の法則などを認識しなければならない。(p126)
- (9) 神の法則—生命の法則—はいつも条件次第のものであり、いつも冷厳なものである。しかし、母親、女教師、保母たちは、神がわれわれの身体とその身体の存在している世界とのつながりを定められた諸法則のなかでいかにすべきかを、実地に役立つようには教えられてはいない。(p133)
- (10) われわれはすべての母親が健康を守る看護婦となり、貧しい病人はすべて自宅に地域看護婦を迎えるその日のくるのを待とう。(p144)

ここで、「母親」「女教師」「保母」と女性の役割や職業を並べて述べていることに注目した。一見、強調として例を変えて述べているかと考えられたが、ここには「女性」としての生物学的な普遍性が意図されているように思われてきた。それは、(1)「人間誰しも生まれてこなければならないのだから…」や(2)「家族の生命についてのこの偉大な女主人、彼女からすべての人が生まれてきた…」というくだりからも伺えた。

この論文が「女性の使命」というテーマにあてて書かれたものであることと重ねて考えると、ここでもナイチンゲールが人類の普遍的な法則性を頭脳におきつつ「女性の使命」を表現しているということが見えてきた。

ここでは、<人間の健康を守る要は「女性」であり、女性は「生命の法則」「健康の法則」を読みとり、かつ、それは外界とのつながりにおいて変化し続けているからその条件を読みとることが必要である。それは容易なことではないが、その力は与えられているはずである。>という意味を読みとった。

以上より、ナイチンゲールがとらえていた

対象論として以下の内容が読みとれた。

対象を人類の普遍的な法則性という観点からとらえて、心と体と社会関係をもつその人が、24時間の生活の中で健康状態が左右され、それは家族や職場や学校などの小社会とのつながりにおいて変化し続けている。そして、健康状態は、外界の状態と連動して変化し続けているので、その条件を読みとるの必要があり、その力は人間に備わっている。

## ②ナイチンゲールは看護をどのようにとらえていたか：目的論

- (11) 病気とは何か、病気は健康を妨げている条件を除去しようとする自然の働きである。それは癒そうとする自然の試みである。われわれはその自然の試みを援助しなければならない。病気というものは、いわば形容詞であって、実体をもつ名詞ではない。(p128)
- (12) 健康とは何か？健康とは良い状態をさすだけではなく、われわれが持てる力を十分に活用できている状態をさす。(p128)

ここで、ナイチンゲールは「病気」と「健康」を、固定的なものとしてとらえるのではなく、人間に内在する自然治癒力に着目して、その変化の状態としてとらえていることがわかった。

「病気」や「健康」をそのように位置づけたうえで、看護について以下のように論述している。

- (13) その芸術とは、病人を看護する芸術である。病気の看護ではなくて、病人の看護というところに注意してほしい。われわれはこの芸術を本来の看護〔nursing proper〕と呼ぼう。(p125)
- (14) 本来の看護は病気に苦しむ病人に生きる手助けをすることなのである。これは、健康な人への看護が、健康な子どもや人々の体質を病気のない状態に保っておこうとすることと同じである。(p128)

(15) 家庭での健康を守る看護もこれと同様に、健康な人の生命力をできるだけ高めるように、この同じ自然の力を適切に活用することを意味するのである。(p132)

(16) その芸術は世界中のどの家族にも関わりがあり、また家庭生活から発し、家庭の中でのみ教えることができるものである。それは健康についての芸術である。(p126)

ここでは、ナイチンゲールは、病人への援助は健康な人を病気のない状態に保っておこうとすることと同じであると、病人の看護と健康な人への看護の共通な性質について言及している。これは、自然治癒力という人間に備わっている働きに着目して病気を健康な状態からの変化としてとらえているが故に見出した法則性なのであろう。そして、健康を守る看護が、家族や家庭生活と密接な関係性にあることを示していると読みとることができた。

(17) この要求は、ほとんどこの世界と同じくらい古く、この世界と同じくらい大きく、われわれの生や死と同様にのびきならないものなのである。それは病気についての要求である。(p125)

(18) 神が、母親のそばにいつも医師を付き添わせようとは意図されなかったために、もっと古くからの、もっと大きなひとつの要求がある。(p126)

ここでは、ナイチンゲールは健康への要求も病気についての要求も、人間のもつ根元的なものであると位置づけていると読みとった。また、病気についての要求に対して健康への要求を「もっと古くからの、もっと大きなひとつの要求」と表現している点にも注目した。これは、病気を健康な状態からの変化としてとらえた場合、より普遍的なものとしての健康への要求という位置づけがナイチンゲールの頭脳のなかで定まっていたのではないだろうか。

そして、両者の看護について以下のように述べている。

(19) 二つの看護はいずれも自然が健康を回復させたり健康を維持したりする、つまり自然が病気や傷害を予防したり癒したりするのに最も望ましい条件に生命をおくことである。(p128)

以上より、ナイチンゲールがとらえていた目的論として以下の内容が読みとれた。

あらゆる人間に働く自然治癒力という法則性を押さえた上で、病気を健康な状態からの変化としてとらえ、人間のあらゆる健康のレベルを看護の対象として、自然治癒力が働きやすいように最も望ましい条件に生命をおくことである。

### ③ナイチンゲールは看護の方法についてどのようにとらえていたか：方法論

(20) 家庭内の健康は、家庭からのみ学ぼうし家庭内においてのみ学ぼう。(p135)

(21) 「人々は講義に大変興味を示している」というだけでは明らかに不十分である。要点は、その人たちが後でその講義を、自分の家で実践してみたかどうか、また家族の健康と健康を増進する手だてとしてそれらを実際に追うようしたかどうか、である。母親たちにとって家族の健康より以上に実践してみる価値のあることがあるであろうか。(p135)

(22) その対策については、その原因と同じほどよく知られている。しかし、この知識のうちのはたしてどれだけが家庭内に採り入れられ、貧しい人にも富める人にも、習慣化されてきたであろうか。(p133)

(23) 看護そのものは、病人のベッドサイドや病室内または病棟内においてのみ教えられるという理由もここにあるのである。それは講義や書物を通して教えられるものではない。講義や書物が補助的なものとして使われるのであれば価値があるのだが、そうでなければ書物に書いてあることは役に立たない。(p125)

この4つのセンテンスから、以下の内容を読みとった。

健康は24時間の生活のなかで決定されている。

くが、日常の正常な状態はとらえにくく（ナイチンゲールは「すべてのことが健康より優先されている。…われわれは正しいことを確信する前にまず誤謬について確信するもの」と述べている）、健康を守る看護にはなっていない。生活者も専門家も健康を守る看護の重要性を感じてはおらず、その教育はよくて関心を抱かせる段階に留まっており、真の意味で生活の中で応用し、習慣化されていくような知識とはなっていない。生活する人々の中で意識化されて習慣化されることが、健康への看護のゴールである。そのためには、生活の場に出向き、生活の場の中でどのようにすることが健康の法則性に沿うことなのか、何が健康の法則性に背くことなのかを伝え、生活者自らが考えていくことができるような専門職の力が求められている。病気の看護についても同様のことが言える。病人への看護も健康への看護も生活現象とともにあるのであるから、その人の生活から切り離して考えたり、教えたりすることは意味がない。

(24) それ（健康についての芸術）は、母親、少女、女主人、教師、保母などあらゆる女性が実地に学ぶべき芸術である。(p126)

このセンテンスからは、家族の健康を守るのは、世代を越えたあらゆる女性の使命であり、かつ、家庭だけでおこなえばよいということではなく、家族たちが生活するあらゆる場で考えていく必要があるという意味を読みとった。また、「母親、少女、女主人、教師、保母」という表現には、自分以外の他者への健康に関わる女性が場や条件を変えて担う役割という社会関係の広がり、人間のライフサイクルという視点が同時に注がれているように思われた。

以上より、ナイチンゲールがとらえていた方法論として次の内容が読みとれた。

日常生活のなかで健康状態が決定されるという認識にたち、人間のあらゆる健康のレベ

ルを看護の対象として、自然治癒力が働きやすいように最も望ましい条件に生命をおくために、生活者自らが健康の法則を意識して実践でき、習慣化できることが必要である。そのための専門職の力が求められている。

以下の2つのセンテンスについて、対象論、目的論、方法論が統合された内容であり、普遍性の高い内容として円錐の上層に位置づけた。

(25) 赤ん坊を健康に育てるための方法を、一般の助産婦や普通の母親に教える体系的な指導が行われているところを、私はまだ見たことがないが、それは健康な国民をつくりあげるうえでの最も大切な機能であると思う。(p127)

ここで、「赤ん坊を健康に育てるための方法」を、単に赤ん坊が元気で、病気にかからないことととらえるとナイチンゲールの意図の深みがみえてこない。(12)の健康の定義を重ねてみると、「赤ん坊を健康に育てるための方法」という表現には、持てる力を十分に活用できるように育てていくという意味が含まれていると読める。家族のなかに生まれた赤ん坊が家族のなかで、持てる力を十分に活用できるように育まれていけば、大人になり、家族を形成したときにも、また同様に赤ん坊を健康に、持てる力を十分に活用できるように育てていくことができるであろう。赤ん坊を健康に育てるということは、世代を越えて脈々とつながるものであり、ひいては国民全体の健康を左右する重要なものであるという意図が込められているのではないだろうか。

そして、そのような社会が形成されること、そのために願いを託して、以下のように提示している。

(26) すべての幼児、すべての人たちが健康への最善の機会を与えられるような方法、すべての病人が回復への最善の機会を与えられるような方法が学習され実践されるように！(p144)

壮大で、ゆるぎない看護の本質的目標であるが、これは現在の私たちの身の回りでおきている日常のこまごましたことからひとつひとつ積み重ねていくを通して、創りあげられていくのではないだろうか。

#### ④ ナイチンゲール看護論における家族看護学の源流

『病人の看護と健康を守る看護』は同じ内容をさまざまな現象を用いつつ多様な角度から述べているので、読み始めた当初、難解な印象を持っていたが、意味内容を読みとっていくにしたがって非常に論理的な構成になっていることがわかった。

すなわち、一貫した論理の流れのなかで現象から普遍性へと自在にのびりおりする認識のありよう—看護に関する立体像<sup>9)</sup>—と、対象論、目的論、方法論が重なった重層構造のような認識のありようが見えてきた。

それらの内容と、‘家族看護’の概念を重ねてみると、ナイチンゲールのとらえた「看護」の概念のなかに、「家族のなかに生まれて、24時間の生活のなかでつくりつくられる存在」とする家族、あるいは個をとりまく小社会との関係性でとらえた対象論が内包され、それを核として目的論、方法論が形成されているということがみえてきた。したがって、研究対象としたナイチンゲールの著作には‘家族看護’という表現は用いられてはいないが、家族という小社会を視野に入れた看護の発想はナイチンゲールにおいてすでに形成され、確立させていたこと、また、人間の健康にとっての家族のもつ意味が明確に立体像として示されていたことが理解できた。

家族看護学の今後の発展の方向性として、さらに‘家族看護’という観点からナイチンゲールの著作を探って現代につながる原理を学ぶと同時に、ナイチンゲール看護論をベースに実践を重ね、専門職としての能力の育成や学的研鑽を積んでいくことが求められてい

るといえよう。

#### 《引用文献》

- 1) 病人の看護と健康を守る看護、著作集第二巻、352、1998.
- 2) S. M. Harmo Hanson, S. T. Boyd: Family Health Care Nursing Theory, Practice, and Research, 1996、村田恵子他監訳、家族看護学 理論・実践・研究、医学書院、2001.
- 3) 薄井坦子：実践方法論の適用 家族を基盤にすえた対象理解、千葉大学看護学部主催国際シンポジウム 家族看護学研究の動向、17、1993.
- 4) 薄井坦子編：ナイチンゲール言葉集—看護への遺産—、vi、現代社、1995.
- 5) 前掲書 1) 352
- 6) 前掲書 1) 352
- 7) 薄井坦子：ナイチンゲール看護論の学的構造—目的論・対象論・方法論の立体像を探って—、ナイチンゲール研究、第5号、53、1999.6)
- 8) 薄井坦子：ナイチンゲール研究はどこまで進んでいるか—理論看護学の立場から—、ナイチンゲール研究、第2号、4、1994.



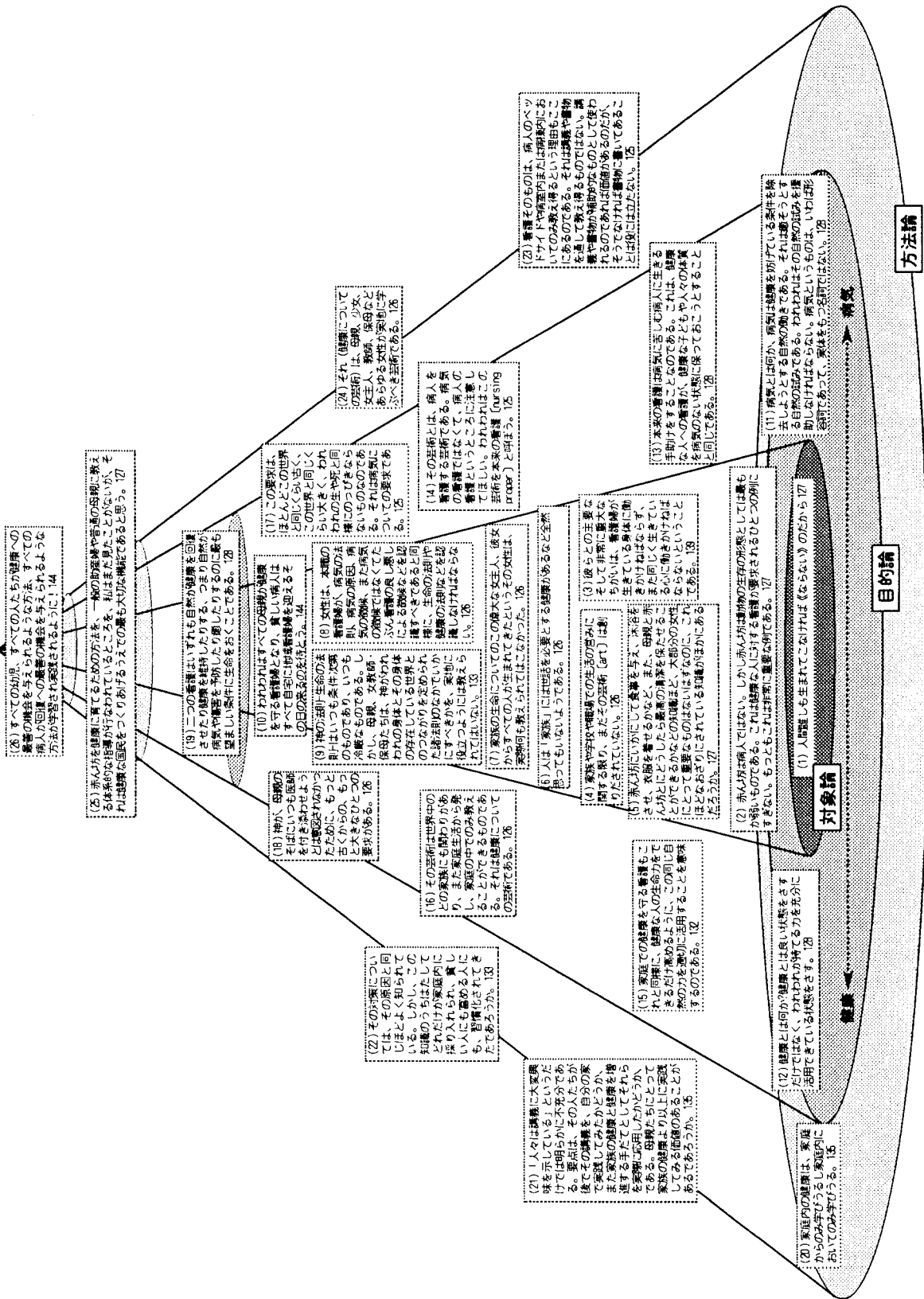


図1 『病人の看護と健康を守る看護』にみる家族看護の論理構造(文頭の数字はキーカードの番号、文末の数字は頁数を示す)